

IAUD Newsletter vol.3 第12号 (2011年 3月号) 目次

1. 特集：研究部会 PJ/WG 主査対談 ～国際会議を終えて—2010 年度振り返り～ 1
 2. 世界の UD 動向：デンマークにおける観光のユニヴァーサルデザイン体験記 14
- 巻末：IAUD Newsletter vol.3(2010 年度)バックナンバー 20

東日本大震災による被害が明らかになるにつれ、その甚大さと影響の広がりが増すばかりです。福島原発の被災による事故も加わり、会員の皆さまにも直接・間接に、少なからず影響が及んでいるものと思います。まずは罹災された皆さまやご家族の方々に謹んでお見舞い申し上げます。

今回の被災状況や、復興に向けての対策を議論するにはさらに詳しく現場を知る必要がありますが、安心・安全という人命にかかわる側面で UD の課題として考えるべきことが多く含まれていると思われます。国民一人ひとりができること、所属する会社や所属団体としてできることなど、協力し合って行動していくことが重要でしょう。IAUD も幅広い業種・業態の会社・団体・個人が集まった組織としての特長や専門性を活かし、今後の活動に取り組むことで一日も早い復興を支援し、牽いては IAUD の目指す UD 社会の実現に一步近づくことにつながるのではないのでしょうか。

現在 IAUD では、新たな中期活動計画や予算の検討が進められていますが、2010 年度の最大のイベントであった国際 UD 会議を終え、2010 年度を振り返り来年度に向けた議論が行われています。今月の巻頭特集は IAUD の活動の核となっている研究部会から大澤部会長、布垣副部会長と各プロジェクト／ワーキンググループの主査の皆さまにお集まりいただき、成川理事長と今年度の振り返りと今後の課題などについて対談を行いました。本年度は国際会議という節目の大イベントがあり活発に活動が展開されたこともあって、熱のこもった意見が交されました。

特集： 研究部会 PJ/WG 主査対談 ～国際会議を終えて—2010 年度振り返り～



日 時：2011年2月17日（金）13：00～14：30

場 所：IAUD サロン（東京・八丁堀）

出席者：大澤隆男（IAUD 理事／研究部会長）
布垣直昭（IAUD 理事／副研究部会長）
神戸由香（余暇の UD プロジェクト主査／パイオニア株式会社）
志田知章（標準化研究ワークキンググループ主査／トヨタ自動車株式会社）
松田 崇（ " 副主査／NEC デザイン&プロモーション株式会社）
室井哲也（労働環境プロジェクト主査／株式会社リコー）
和田紀彦（移動空間プロジェクト主査／株式会社日立製作所）
根岸理香（住空間プロジェクト主査／積水ハウス株式会社）
土村健治（食の UD プロジェクト主査／大日本印刷株式会社）
亀田和宏（メディアの UD プロジェクト副主査／株式会社 DNP メディアクリエイト）
（以上発言順）

聞き手：成川 匡文（IAUD 理事長／情報交流センター所長）

手話通訳（2名）：特定非営利活動法人 江戸川手話通訳者協会

成川：本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。

今回は Newsletter の年度末の恒例となっております主査対談です。基本的に自由に発言していただいて構いませんが、前半は各プロジェクトから国際会議など 2010 年度のトピックスを中心に振り返っていただき、後半はフリーディスカッションとすることにしたいと思います。主査の皆さんが普段の活動の現場で感じておられる生の声をお聞かせいただいで、今後の



IAUD をさらに良くするための意見交換ができればと考えています。会員の皆さまにプロジェクトに参加してみようかなと思っていただけるよう、忌憚のない活発なご発言を、よろしくお願いたします。

それでは、まず各プロジェクトからお話をお聞きする前に、研究部会の全体的な動きについて大澤部会長から、続いて布垣副部会長から一言ずつお伺いしたいと思います。

大澤： 私が研究部会長を務めさせていただいて約3年になりますが、最初のころは多少手探りというところもありました。京都の国際会議である程度のアウトプットがでて、その後どうしていかうかと話をはじめ、浜松の会議での発表をターゲットに活動に取り組んできましたが、具体的な成果がかなりできてきましたので、次はこれを契機にさらに広げて、世界にむけて情報発信をしていければいいと考えています。

布垣： ここ1、2年の大きな変化として、われわれから発信するだけでなく、外から引き合いをいただけるようになってきた、ということがあります。初期の研究成果をアピールするだけでなく、外からわれわれの活動が期待されるようになり、訴求の段階から実践の段階へ移っていかねばいけないと感じます。そういった動きに対応し期待にどう応えていくかが、来年度に向けての大きな課題のひとつと考えています。

成川： ありがとうございます。それでは順に各プロジェクトのお話を伺っていきますが、最初は余暇のUDプロジェクトの神戸さんからお願いします。

神戸： 2010年度は交流会のUDとCM字幕という2つのテーマで活動しました。交流会のUDでは、余暇のUDプロジェクトは聴覚が5人、車いすが1人と障害当事者のメンバーがたくさんいるので、自分たち自身の問題として、普段あまり言えないような本音も出して話し合いました。国際会議で発表したノウハウ集やコミュニケーションブック、筆談ボードなどは実際に自分たちで使うものとして実態に沿ったものができたと思います。当事者でないと分からないことが多いので、IAUDの活動としても、もっと生活者を巻き込んだ方向に持っていったら良いなと感じています。



CM字幕では今年7月に完全にデジタル化を迎えることもあり、いろいろ動きがありました。昨年7月にはデジタル放送推進協会がCMバンクから流すCMに字幕をつけたり、富士通さんがオープンキャプションをつけたり、また1社提供番組でCM字幕にトライする企業なども出てきました。CM関連団体との情報交換会でも、このようなトライアルを増やしていきたいと話しています。また今年は啓発活動にも力を入れました。ろう学校の小学部を中心にCM字幕の絵本を配布し、生徒やご両親の生の声を集めました。生活者や当事者と一緒にやっというのが、私たちのプロジェクトの特長だと思います。

困ったこととしては、国際会議として成果を出さなきゃいけないという中で、企業によって活動にかけられるパワーが違うので、その中で1つのものをつくりあげるといことの難しさを感じました。国際会議においても場所が遠かったので、出張が難しい。各自が説得するには限界があると感じ、余暇のUDでは担当理事から各社メンバーの上司あてにメールを出していただきました。IAUDから、研究部会に参加している会員に対するフォロー体制がもう少しあるといいなと思います。また会員のみなさまにアンケートをお願いしても、各社の窓口から先にもうまく降りていないのか回答率が低かったです。せっかく企業が集まっている団体なので、もっとそれを活用していける風通しの良いしくみができるとう良いなと思います。

要望としては、プロジェクト内で作成した冊子などで、外部から欲しいと希望があった場合など、プロジェクトの予算だけでは対処しきれない面があるので、一旦、成果としてまとめたものは、IAUDとして対応していただくなどのご相談をしたいなと考えているところです。

成川： ありがとうございます。ところで、筆談ボードというのは一般のユーザーさんが手に入ることはできますか？

神戸： いろんな方から欲しいとか作り方を教えて欲しいといわれますが、残念ながら現在のところ対応できていません。今後やるとすればIAUDのホームページでその作り方を紹介したり、市販品で代用できるものもあるので、そのようなことをお伝えしたりということも、検討していきたいと思っています。

成川： それでは次に標準化研究ワーキンググループからお聞きしたいと思います。

志田： 前任の宮澤から引き継ぎました主査の志田です。まだよく分かっておりませんので、今年度の振り返りについては副主査の松田さんからお話していただきます。

松田： 2010年度は他のプロジェクトと同様、基本的には国際会議で発表する内容の検討を中心に活動してきました。



活動のポイントとしては、社会に向けてのアウトプット、他のプロジェクトや会員（企業・団体）へのフィードバック、これに加えてWGメンバー自身が知見を広める場としての参加メリット、という3つの点を考慮して活動に取り組んできました。最初の2つはUDマトリックスのWeb版などのUD開発ツール類の公開や国際会議での成果発表などです。3点目の

参加メンバー自身が知見を広める場としては、今年度はIAUDアワードを受賞した南アルプス市健康福祉センターやユニークなりハビリ専門病院の見学会を実施しました。

UDマトリックスについては、今後しくみとして考えていかなければいけないのですが、いくつかのプロジェクトや会員企業で活用いただいている事例などをフィードバックしていくことと、外からの改善提案の依頼などに対してIAUDとしてどう対応、あるいは共有していくのかという課題があります。また、国際対応ということが大きなテーマとしてあるのですが、昨年度、海外の情報収集を京都工芸繊維大学に委託して行いました。これらを現在のUDマトリックスにどう加えていくかということは、今年度は残念ながら手がつかなかったのですが、来年度に向けて検討を進めていきたいと思えます。さらに、日本語で公開している現在のWeb版自体を英文化するという課題もあります。国際会議でのアンケートでもぜひ英訳をとという声も伺っていますが、Web版の英文化については予算や実作業の問題など、WGだけでは難しい部分もありますので、課題をしっかりと整理して、今後ご相談しながら取り組んでいきたいと考えています。

成川： ありがとうございます。国際対応については理事会などでも重要課題としてディスカッションし、私自身としてもいろいろ考えていますが、今この場で具体的な議論をしますと時間が足りなくなります。後ほど時間があれば少しお話したいとは思いますが、今後、しっかり検討して進めていきたいと思えますので、よろしくお願ひします。それでは次に労働環境プロジェクトからお願いいたします。

室井： 労働環境プロジェクトでは、2010年度はオフィスセキュリティのUDということで個人認証システムをテーマに取り組んできました。インターネット調査でも個人認証システムはかなり普及してきていることが分かりますし、導入されているオフィスでは一日に何度も利用され、改めて身近な問題であることがはっきりしてきました。



2010年度は筑波技術大学の学生と共同研究したのですが、学生さんたちにとっても個人認証のしくみが導入されて間もない時期だったので関心が高く、自分自身の問題として取り組むことができましたようです。ユーザー視点の活動として学生さん自身にとってもメリットのある活動ができたと感じています。

一方、反省点としては企業会員の立場から、参加メンバーのメリットという点で、テーマを絞りきれなかったということがあります。課題として先ほど余暇のUDプロジェクトからもでていましたが、参加メンバーが何ヶ月も時間をかけてIAUDの活動に参加することは正直、次第に難しくなっていて、3月の成果報告会など会員どうしで情報共有する場というのは大変貴重な機会ですが、参加しやすい配慮や情報共有の場をもっとコンパクトにすることも考えていく必要があると感じています。

成川： 参加している企業にとってのメリットという話がでましたが、これは大きな課題で、全ての会員にとってメリットがあるというのは非常に難しいところです。しかし IAUD の存在意義はそういうところではなく、1つの企業ではできないことが同業者や幅広い業種の企業が一緒に活動するからこそできることがあるのではないのでしょうか。IAUD はそのためのプラットフォームとして参加する側もその特長を活かして工夫をして活動に参加することが重要だと考えています。自分の会社にとってのメリットばかり考えると難しくなってくるので、IAUD としてもその存在意義を原点に立ち返って本気で考えていく必要があります。そのために研究部会でも 2011 年度のプロジェクトの活動方針やテーマについてしっかり議論をしていただきたいと思います。



それでは、どんどんお聞きしていきたいと思いますが、次は移動空間プロジェクトからいかがでしょうか。

和田： 移動空間プロジェクトは2つの大きなテーマで活動を続けてきました。ひとつ目は公共空間の移動情報の調査手法の研究、それに加えて2年ほど前に静岡県に声をかけていただき、静岡・新静岡駅前の公共空間のサインについての調査・アイデア提案に取り組んできました。国際会議ではその成果を発表・展示し、いろんな方から具体的な反応をいただき大変良かったなと感じています。プロジェクトとしては2003年あたりからずっと「シームレス・モビリティ」というテーマを継続して取り組み、積み上げてきたということが成果として形になってきたということです。この一年の活動としてこだわったことは、静岡という具体的な場とニーズがあったので、調査研究だけでなく具体的な形にするクリエイティブな活動をしたかったということで、メンバーにはかなりの負担をかけたと思いますが、国際会議では目に見える形で提案することができ、やりきったという手応えは感じています。

先ほどから話題になっている、自社の業務に直結するテーマということではないですが、デザイナーとしてのモチベーションを持続させるということが大切で、メンバーにはサインデザインを専門にしている人はひとりもいないのですが、経験のない新しい領域に踏み込んでいくというところにモチベーションを感じていただけた1年だったのではないかなと考えています。

調査手法ということでは情報交流センターから IAUD の Web サイトなどで情報公開をしていただきました。今後も新しい成果など継続して情報発信していくことが重要だと思っています。

主査をやっていると成果や予算ということがつい気になりますが、テーマ次第でメンバーの意識を高めることができるので、まずテーマ設定が大切だなと感じています。しかし、集まった人の興味で決めるのではなく、テーマが先にあり興味のある人が集まるというのが本来のあり方だと考えるので、テーマ説明会などを実施してメンバーを募集するというやり方もあると思います。

また、プロジェクトで話していると、今年のように具体的なテーマで活動することだけでなく、始めて活動に参加する若いメンバーのためには、UD の基本的なところを改めて勉強しあったり新たなフィールドを広げたりする場が欲しいねという声も聞かれました。



成川： おっしゃっていることは大変良く理解できます。私自身も現在のプロジェクトの分け方一度考え直しても良いと感じています。衣食住など複数のプロジェクトに絡んだ共通する



テーマ、横断的な切り口を設定するなど、まったく新しいプロジェクトを作ったり、合体したりすることでも良いと思います。例えば移動空間のシームレス・モビリティのようなテーマでも、さらに地域のコミュニティまで広げると、新たな視点や参加メンバーの広がりが出てくるのではないかと思います。これまでは具体的なテーマで研究・調査することが中心で、なにより成果も見えてきましたが、今後は単体の製品やサービスの開発や提案に留まらず、例えば国や自治体などに働きかけて、具体的に社会で実現

する段階まで目指して取り組んでいくこともやるべきだということを話しあっています。今、お聞きしたこととベクトルは合っていると思いますし、そういったことをしていく中で参加メンバーや会員会社のモチベーションも上がっていく、というしくみを考えていきたいと考えています。

それでは続いて、住空間プロジェクトからよろしく願いいたします。

根岸： 住空間プロジェクトの本年度の活動は、「UD プラス」という、通常のUD の概念から一歩進んだ考え方について深めてきましたが、何か不都合やバリアをなくすとか、マイナスの条件をゼロにして機能的に満足を得るというだけでなく、「UD プラス」では楽しいか機会が増えることで体や心に働きかけが行なわれて、より活性化するというイメージしながら、いろいろな調査や早稲田大学との共同研究を行ない、浜松の国際会議でまとめて発表しました。

「UD プラス」自体がどこから出てきたかという、いろいろな建築空間や住宅空間を視察する中で、人がいきいきと暮らしている空間はバリアがないというだけでなく、もっと人に働きかける刺激があるという気づきがあり、その後、さらにいくつかの事例を視察する中で確認していきました。また、「UD プラス」の概念を補完するために行った早稲田大学との共同研究では、階段を昇降するという機能的な動作について、空間性によって行動する人の意識が変わるかどうか、あるいはモチベーションによって行動に影響があるかなどを調査しました。結果として閉鎖的で退屈な空間であればあるほどモチベーションが影響を与え、その違いにより疲れの感じ方などが変わることが分かりました。「UD プラス」はモチベーションを上げることと環境や機会（頻度）を掛け合わせることで空間の魅力やUD 度合いの向上が図られる、という仮説まで導き出しました。



われわれの中では大きな方向は間違っていないだろうと考えているのですが、果たしてわれわれが見てきた建築や住宅空間に限らずその他の領域でも同じ考え方が通用するのかというところを、今後、来年度の取り組みとして、プロジェクトを横断した活動に広げていきたいと考えています。具体的にはこれから他のプロジェクトの方の参加も募って、一緒にできることを検討していきたいと思いますのでよろしく願いいたします。

成川： ありがとうございます。衣のUD プロジェクトについては主査の一色さんが、本日はご都合がつかず、いらっしゃっていないので、大澤部会長から今年の活動を振り返っていただけますか。

大澤： 衣というのは生活の中でとても大切な要素のひとつですが、プロジェクトとして活動するにあたりメンバーのなかでテーマの方向性を決めるまでに少し時間を要しました。しかし、実際にモノを試作して着易さなどを評価してみようということが決まってからはス

ピードアップし、具体的な成果がでてきました。素材検討から縫製など、会員のユニバーサルファッション協会の方々の知見やご協力もいただきながらUDジャケットの試作をしました。具体的な対象物ができたので、それを評価し改善することを何度か行い、国際会議でその成果を報告していただきました。

今後、プロジェクトでも考えていかれると思いますが、余暇のUDや住空間プロジェクトと同じように、ファッションは生活を楽しむという要素がありますので、これからの展開に期待したいと思います。

成川： ありがとうございます。衣だけでなく住空間や余暇のUDでも取り組まれています。楽しさということも大切なUDの要素だと思います。また、仕事着のようなものは労働環境が深く関わってきますし、さらには、労働環境といってもオフィスだけでなく、建設工事現場などまったく異なった環境もあります。以前、建築現場で使う足場のリース会社の社長さんと話をした際、障害があっても楽しく働ける職場にしたいということをお聞きしました。共通のテーマとして取りあげるのは難しいところもありますが、UDの対象は大変幅広く、現在のプロジェクトの切り分けを越えた横断的なテーマがたくさんあると思います。IAUDとしても継続して考えていく必要がありますので、皆様のご意見もよくお聞きしたいと思います。それでは続いて、食のUDプロジェクトからお願いします。

土村： 前任の弊社の古田が理事になりましたので、国際会議の直前から私が主査を務めさせていただいております。プロジェクトの目的は基本的には、食生活をUD視点で快適にしていくということです。具体的な取り組みとしては大きく2つありまして、ひとつは食品パッケージに使う共通ピクトグラム、具体的には「やけど注意のピクトグラムの開発」。2つ目はWEBを活用した「生活者の食品パッケージに対する意識調査」です。



「やけど注意」のピクトグラムについては、足掛け3年に渡り取り組んできましたが、昨年4月、IAUDのホームページで紹介され、対外的にリリースすることができました。その後、日経新聞、朝日小学生新聞、読売新聞と立て続けに記事として取り上げていただき、その影響の大きさを実感することができました。プロジェクトとして長い間取り組んできましたので、このような成果となりメンバーは大変喜んでおります。

もう1つのWEB調査については、2008年から毎年続けてきたものですが、2010年は、外国人のパッケージに対する意識が、日本人の意識とどれくらい違うのか聞いてみようということで、日本在住の外国人を対象にアンケート調査を実施しました。国際会議ではこの2つのテーマの成果を、プロジェクトとして発表させていただきました。

現在、プロジェクトのメンバーは、食品メーカーであるサントリーさん、キューピーさん、デザイナーや料理研究家の方と、担当理事会社であるわれわれ大日本印刷の8名です。スケジュール調整は大変ですが、アットホームな雰囲気の中で楽しく活動を続けています。

今回、浜松の国際会議にはプロジェクトのメンバーの半分以上が参加し、IAUD全体の活動を共有できたことや、静岡県での開催ということで地元の自治体や企業、学生の皆さんの取り組みを体感できたことは大変良かったと思います。

IAUDはさまざまな業種や職種の方がいて、幅広い交流ができます。また一方で各プロジェクトでは、普段の業務とは違うテーマにも自主的に取り組める事が大きな特長だと思います。しかし、会員全員が国際会議や研究部会などに参加できれば別ですが、プロジェ

クトで活動するメンバー以外の会員は、IAUDの活動全体を知る機会があまりないということがひとつの課題だと思います。以前、私の代わりにプロジェクトメンバーの方に研究部会に出席していただいたことがあります。他のプロジェクトの活動内容が分かり、とても良かったとおっしゃっていました。そしてその事がきっかけとなり、メディアのUDプロジェクトにも掛け持ちで参加されるようになりました。このように多くの会員の方が「成果報告会」等の他にも、もっとIAUDの全体像が把握できる機会が増えると活動の場が広がり、さらに活性化されていくのではないのでしょうか。

成川： 私もそうですが、IAUDになぜ参加しているかというひとつの理由として、人脈の広がりということが非常に大きいと思います。しかし、そのメリットが会社の利益にすぐつながるかという問題はあって、参加する個人のモチベーションと会社のメリットがうまく両立すると良いかと考えています。ありがとうございました。

それでは最後になりますが、メディアのUDプロジェクトからお願いします。

亀田： メディアのUDプロジェクトはIAUDのプロジェクトの中では一番新しく若いのですが、そう思っているうち既に2年半が経ってしまいました。当初はメディアという非常に幅広い領域のなかで、どうテーマを絞っていくかというところで少し時間がかかりましたが、主査になっていただいたカラーユニバーサルデザイン機構の伊賀さんのアドバイスもあり、「色」に絞って活動を展開してきました。他のプロジェクトが衣食住などプロダクト・オリエンテッドというか、モノづくりをより強く意識していることに対し、「色」という要素にこだわって活動を展開してきたところがこのプロジェクトのユニークな点だと思います。

2010年度は国際会議に向けて、色の中でも「カラーUD配色」ということをテーマにして、色の組み合わせの持ついろいろな意味合いが、色弱の方にもきちんと伝わることを配慮した配色をトライアルとして取り組んできました。国際会議では「カラーUD配色イメージ・スケール」として発表することができました。

2011年度はこの成果をもとに「今後どうするか」をここ数回議論しております。色の問題は紙メディアに限らずウェブやサイネージなど、新しいメディアが増えていく中で標準化が、意識されはじめています。参加しているメンバーがグラフィックデザイナーもいればディレクターやプロダクトデザイナーもいるというなかで「最低限の共通ルール」があった方が良いのではと考え、公益性の高いアウトプットを目標に、夢は大きく「JIS化を目指そう」という掛け声のもと、エンジンをもう一度掛けなおして活動に取り組んでいきます。

国際会議に関しては皆さんもいろいろおっしゃっているとおりですが、個人的には企業参加とプロジェクト活動の参加とを両方一遍にやったら、どっちつかずになってしまった気がします。皆さんの研究発表や論文などをもう少しじっくり見たり聴いたりする時間がとれば良かったなと感じています。分かっているようで意外に見えていないところも多く、お互いにじっくり聴いてディスカッションするような機会が作れたら、新たな発見や知見をもっと深めることができたのではないかと思います。



成川： ありがとうございました。ひとあたり話をお聞きし、抱えている悩みなもいろいろ見えてきましたが、共感できることやこんな解決方法もあるよなど、ここからは特にテーマを決めずにフリーディスカッションにしたいと思います。どなたからでも、何でもどうぞ。

亀田： 私の場合、会社に戻ると IAUD って何だ、という質問を繰り返し何度も、いろんな人から聞かれるということがあります。IAUD のサイトを見てくださいますと相手が相手なら良いのですが、役員クラスだとそうも言えず、説明資料をたくさん作って報告に行かなければならなかったりします。その意味でも、もっと IAUD の知名度をあげることが大切なのではないでしょうか。社内で聞かれたときには、日本の優良企業 100 社以上が集まった日本を代表する UD の団体だ、という言い方をしているのですが。

大澤： そういう意味では実績も少しずつできていてネタもそろってきたので、いろいろな場面で世の中に情報発信ができるようになってきているのではないかと思います。それぞれのプロジェクトからも対外的に公開したいという声も最近多く聞かれます。世の中にしっかり発信していくと同時に、それに対していろいろ意見や反応もでてくるとお思いますので、次のステップに向けたテーマが見えてくるということもあるのではないのでしょうか。



また、研究部会に登録しているメンバーだけでも全部で 200 名以上 300 人近くいるので、コアメンバーはもっと少ないかも知れませんが、それを広げていくためにも、最初のステップとしてはまず IAUD 会員に向けて積極的に情報発信していくところから始めていくのが良いのではないかと考えています。

成川： IAUD って何かということがすぐに説明するのが難しいということですが、それは大変重要なことで、それがうまくできないと参加もできないですし、会費をいただくこともできないという話になってくる訳ですからね。われわれとしてもそういう質問に即答できるようにパンフレットなどでも簡潔に表現し、共通の材料やツールを準備して充実させていく必要がありますね。

志田： 今日の午前中、たまたま障害者の方にお会いすることがあり、私は人間工学が専門なので、トヨタとしての取り組み紹介と、それに関係して IAUD 活動のパンフレットをお見せしながら説明しました。その中で各プロジェクトの体制図を見られ、何故こんなに多くものプロジェクトが個別に活動しているのか、本来の UD というのは全体最適的に、横串で考えるべきではないですか、とズバっとおっしゃられました。私の標準化研究 WG は全プロジェクトの横断的なテーマを考える組織ですが、一般の方でもそういう疑問を持たれているようなので、今後の改革の中で各プロジェクトの横断的テーマを検討する必要があると感じました。



成川： そういうクロスしたテーマはひとつの企業ではやり難くて、まさに IAUD のような団体だからできることです。今回の国際会議を例にあげると、地元の自治体と一緒にできるプロジェクトの可能性もでてきましたし、各省庁も展示をさせていただいたりセッションでも積極的な姿勢が見えてきたり、次第にコラボレーションできる形になってきた感じがします。今後はそこで終わらせるのではなく、政策に反映させていくなど具体的なかたちにしていくことが重要だと思います。

志田： 私も先回の国際会議を聴講させていただきましたが、その成果が何だったのか振り返り、

それをどう発展、継続させていくかをしっかりまとめて、一般の方にどう分かりやすく伝えていくかがとても大事だと思います。

布垣： 話題がかなり IAUD のあり方の核心にふれてきた感じがしますが、内容的には、研究部会



でまさにこれから議論しようとしていたところでした。IAUD の知名度が上がることは結果であって決して最終的な目的ではないですし、それでは IAUD とは何なのかということですが、当初、IAUD も UD という概念を普及させることに重きを置いていた時期があります。その意味では UD が学校の教科書に載るようになってきたり、テレビの番組でも UD 商品のことがクイズの問題になったり、かなり一般化してきたと思います。それは決して IAUD だけの努力だけでなくさまざまな取り組みの結果としてそうなってきたと思

いますが、当初の目的はある程度、果たせたのかなという感じはしています。国際会議も三回目を開催し、何が変わってきたかという、最初は IAUD からやらせてくださいと一生懸命働きかけないとできなかったのが、最近は、次の開催についても自治体などから名乗り出てこられるようになってきました。それはまわりに、その意味を認めていただけてきたということで、IAUD が続けて開催してきた成果のひとつだと思います。

また、会議の開催だけでなく静岡駅前のプロジェクトのような UD の視点での調査や評価・提案についても、次はうちでやって欲しいという相談がくるようになってきています。そういうことが増えてくると、それを請けるには今のような切り分けのテーマごとのプロジェクトではなく横断的に考える体制が必要になってきます。しかし、実際にそういう期待があり具体的な依頼がきて、お金も出していただくということになると、なおさら請ける側としてのコミットメントやしっかりとした覚悟が必要になってきます。

以前から大澤部会長とは、IAUD は業種団体ではないので同じ業種の会社だけが集まって活動してもしょうがない、IAUD ならではのクロスオーバーしたタスクベースのプロジェクトをやっていききたいということをお話し合っていました。以前はやりたくても適当なテーマが見つからなかったというのが実情でしたが、これからは変わるのではないのでしょうか。具体的な成果も少しずつでてきて、メディアなどでもとりあげられたりしてくると、そういうプロジェクトに参加することで人も育ってきます。将来的にはビジネスにつながりそうだということになってくれば、会員企業の見方も変わってくるのではないのでしょうか。話を少し広げすぎたかも知れませんが、今後の方向性として期待しているところです。

和田： われわれプロジェクトの主旨は、野球でいうとプレーイングマネージャーというところなので、皆さん現場の声をいろいろお聞きになってと思いますが、長く活動に参加されている方と新しく参加される方とではかなり違いがあると感じています。プロジェクトの活動はまず人ありきだと思うのですが、メンバーが新しくなると活動がゼロリセットされてしまうということがあり、そのまま続けていると破綻する場合があります。その意味でも継続したテーマのもとに活動するグループと UD を基本的なところから勉強するグループなど、活動への参加のしかたにいろいろな選択肢があればあるほど、受け皿としては良いのではないかと考えています。



大澤： この問題は重要なところなので、研究部会で今後しっかり議論していきたいと思っています。

少し話題を変えますが、IAUDとしてUDをどうとらえるかというところで、住空間プロジェクトからUDプラスということや、メディアのUDプロジェクトのカラーUDでもハザード研究から、だれでも共通の感情や印象を感じられる配色を作ろうとか、余暇のUDでも楽しい交流会をやろうとか、その他のプロジェクトでも効率性だけではなく、そこからさらに一步踏み込んで、楽しさとか生活に潤いを与えるような要素を考慮するということが共通してできているように、個人的には感じています。そのような今後のUDの新しい方向性というところでは、皆さんいかがでしょうか？

室井： われわれが活動を開始した、UDという言葉自体もよく分からないというところから比べると、求めるものがモノに対する欲求から、形の無い満足感や働きがい、やりがいなど、お金の換算できないものに移ってきている感じがしています。プロジェクトとしてまだ具体的になっている訳ではありませんが、活動の目指す方向としてメンバーの興味もそういうところにありそうです。

大澤： 住空間プロジェクトのUDプラスというのは大変面白いコンセプトだと思っ
ているのですが、プロジェクトではどう考えられていますか？

根岸： 私自身、まだ未消化な部分があるので、ぜひ皆さんのご意見も伺いたいのですが、機能を満足する空間のUDということでは社会的にもかなり浸透が進み、UDに取り組まなくてよいという業界・領域はなくなってきています。そんな中で、UDプラスがUDを牽引していく新しい考え方として、「楽しい」という言葉は少し軽い気もしますが、デザインや空間が人に働きかけることにより、生産性の向上とか健康の維持・増進とかコミュニケーションの円滑化とか、そういうところまで広がっていけば良いと思います。バリアフリーなどのネガティブな頃と比べても、夢のある将来性のあるテーマとして期待しています。しかしそれが本当にUDというコンセプトになじむのかとか、そのために何をすれば良いのかとか、ただ楽しければ良いのかとか、そのあたりがまだよく分からないので、これからじっくり育てていければ良いなと考えています。



布垣： 同じUDというひとつの言葉でも、実際にやらなければいけないことは時代の要請も入ってくるでしょうし、変化していかなければいけない部分もあると思います。最近サステナビリティやエコをUDとかけ合わせてアピールされている企業も多いですし、そうなったとき、以前なら良しとされた解決方法も、今ならエネルギーを使うから良くないとか、駅のホームドアなども事故は防げるけれど、莫大な費用がかかる難しさがあったりします。実施するにあたっては他のことが犠牲になっていないかなど、UDの考えなければいけない要素の幅が広がってきていると思います。UDプラスの話で共感を覚えたのは、人の心の細部に話が入り始めていることで、適切なバリアはあった方がむしろ人にとって良い場合もある、という考え方は非常に人間的でいいなと思っていました。例えば、うまく注意喚起できれば物理的な柵を作らなくても落ちるのを防ぐ方法があるかも知れないですね。そういう人の心とか、思いやりというところまで踏み込んで解決策を考えていくことで、それほどお金をかけなくても解決できるやり方があるかも知れません。UDプラスをきっかけにモノとかお金だけに頼らないUDなど、新しい次元へ広がっていくと良いなと考えていました。

松田： 標準化研究WGの見学会で、リハビリテーションを専門とする山梨県の病院の先生と話をする機会があったのですが、リハビリ中にバリアを無くすという際には、ものすごく熟考されるそうです。一人一人の残存能力や、将来どのように生活が推移していくかということなどを、個別にしっかり見極めるそうで、私たちが簡単にいろんな物のバリアを無くすように考えるのとは対照的で、非常に興味深く感じました。



布垣： 子供が手を切ると危ないからナイフを持たせないと、結局その子供はナイフが危ないということを知らないまま育ち、大人になってから危ないことをしてしまう。長い目で見るとどちらが安全なのかということですね。子供が手を切らない鉛筆削りだとか果物ナイフなどをすぐに作ってしまいがちですが、そこだけに終始してしまうと、子供が危険に対して気をつけようという心を摘んでしまう可能性があります。あえて軽いケガをすることで、世の中には危ないものがある、手を切ると痛いということを知る機会も必要かもしれません。UDもそろそろそういうところを考えていかなければいけないと思います。

亀田： 主査対談らしい話題と言うことでは、メンバーのモチベーションをどう維持していくかということに関して、ノウハウを共有すると良いと思うのですが、皆さんいかがでしょう？

成川： 先ほど和田さんがプロジェクトは人だといわれましたが、メンバーに頼るだけでは人が変わるとまたゼロからスタートということになって辛いですよね。情報交流センターでも考えていましたが、研究部会ではすでに横のつながりでプロジェクトを活性化することをやっていたらいいような感じがします。

大澤： 見学会などもプロジェクト横通しで実施しているものもありますし、私が非常にいいなと思っているのは大学の先生などとの共同研究で、予算はわずかですが、いろいろ知見をいただけて刺激にもなり、異なる領域の先生の考え方なども参考になってとても面白いなと感じています。さらにオープンなディスカッションの場にしていけると広がりがでてくると思います。すぐには解決できなくてもそういうところから問題提起し、新たなコンセプトや提案につなげて、発信していければいいなと思います。

布垣： アウトプットだけでなくインプットもどんどんクロスオーバーさせると良いと思いますね。いっそのこと勉強会や見学会だけのワーキンググループを作ってしまうと、その代わり、幅広い業種や領域に関連したテーマを企画していただければ、予算も取りやすいですし、費用効率も高まり、著名な方にきていただくというような可能性も出てくると思います。

神戸： メンバーのモチベーションということでは、余暇のUDはとても高いなと感じています。アウトプットということでは必ずしも会社に持って帰ってすぐに役にたつものが多い訳ではないのですが、当事者のメンバーが多いことも理由のひとつかも知れません。そういったメンバーからの生の情報やいろいろな調査結果からも非常に刺激を受け、強く感じるものがあるようです。そういう意味ではひとつの会社だけではできない、IAUDの特長を活かしたIAUDならではの幅広い視点での調査などに対しての期待は大きいのではないで



しょうか。

成川： IAUD の次の中期活動計画を検討するなかでの振り返りとして、まだあまり手のついていないことのひとつに生活者との対話ということがありますので、今の話は大変ヒントになります。生活者との意見交換や情報交流、情報発信など IAUD 独自の活動ができる可能性があるところだと思いますので、IAUD 全体としても考える必要がありますが、それぞれのプロジェクトでもぜひ、今後の課題として取り組んでいただきたいと思います。

布垣： 研究部会ではないですが 48 時間デザインマラソンに参加したデザイナーのモチベーションが非常にアップする理由も、直接生活者やユーザーの生の声が聞け、提案内容についてもフィードバックも短時間にダイレクトにでてくるところにあると思います。研究部会としてもそういう活動やプログラムをロングレンジで考えてやっていくと良いと思います。

志田： まだ私案の段階ですが、標準化研究 WG としても UD マトリックスなどのアウトプットを出したことに満足するのではなく、その効果検証や一般の方にどのように使われているのかなどの実態を調べて、マトリックスのスパイラルアップにつなげていきたいと考えています。これらは、プロセスとしてしっかり根付かせるために必要と考えます。

大澤： プロジェクトごとの調査などは比較的できていると思いますが、IAUD の特長を生かした横断的なテーマでの調査などは今後、しっかり実施していきたいですね。



日本の産業界は現在いろいろ難題をかかえています。将来のことを考えると、日本は超高齢社会にも真っ先に立ち向かいますので、UD にしっかり取り組んで、それが上手くいけば日本は世界に規範を示すことができ、世界から尊敬される国、魅力ある国になっていけると思います。そうなるためにも力を合わせてがんばっていきましょう。

成川： 素晴らしいまとめをしていただきありがとうございます。本日は現場からの貴重なご意見や提案をいろいろいただき、意義のあるディスカッションができたと思います。ぜひ、今後の活動に反映させていきたいと思いますので、よろしくご協力をお願いいたします。皆さん、本日は大変お忙しいところお集まりいただき、本当にありがとうございました。



世界の UD 動向

デンマークにおける 観光のユニヴァーサルデザイン体験記

株式会社 グラディエ
代表取締役 磯村 歩



1. はじめに

先日、私は観光のユニヴァーサルデザインの研究のためデンマークに訪れました。車椅子ユーザー、小さなお子さんを連れてきたお母さん、目もしくは耳が不自由な方など多様な特性の方々と一緒に観光を実体験するというものです。一般の旅行者のシナリオを再現するため、代表的な観光地の訪問と極力公共交通機関を利用する行程としました。観光のユニヴァーサルデザインは街づくりにもおよぶ大きなテーマではありますが、本稿はあくまで旅行者として気づきを体験記としてお伝えするものにしたいと思います。

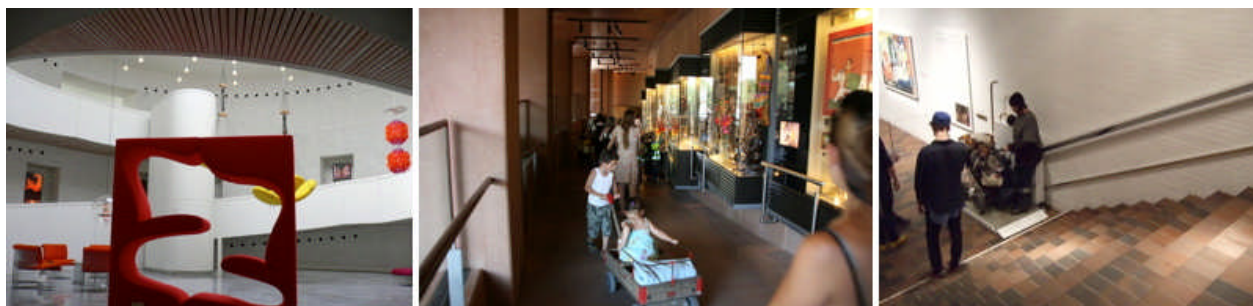
2. ツアーの概略

初日はコペンハーゲン観光の目玉である「ストロイエ（歩行者天国）」「ニューハウン（左上写真）」「人魚の像」などを訪問。二日目は「ルイジアナ美術館」「大型ショッピングセンター」などの施設を中心に訪問。三日目は、少しコペンハーゲンから離れたコリングという街の「コリング博物館」などに訪問しました。本ツアーは株式会社バリアフリーカンパニー（代表取締役 中澤信氏）主催のもので、私はコーディネーターとして参加をいたしました。では気づいたポイントごとにご紹介いたします。

3. 疎外感のないアクセシビリティ



コペンハーゲン国際空港（左上写真）には、エレベーター、エスカレーター、階段がまとめて設置されていました。コペンハーゲンの地下鉄（中上写真）、ショッピングセンターの入り口（右上写真）も同様にこの3点セットでした。日本の施設では、エレベーターと階段が離れているため車椅子ユーザーの友人と「じゃあとでね」と離ればなれになることも多いのですが、これらは友人と一緒に移動できるいい設計だと思います。



トラフォルト美術館（左上写真）とコペンハーゲン動物園の象舎（中上写真）には螺旋状の大きなスロープが設置されています。このスロープは乳母車や車椅子が利用できる傾斜になっています。こうした緩やかな傾斜は移動距離が長くなりがちですが、展示スペースを兼ねることで楽しみながら移動できるよう工夫されています。レイジアナ美術館（右上写真）の展示室の階段には昇降機が設置されていますが、これは見学者が自由に使っているものとなっています。よって車椅子ユーザーだけでなく、乳母車を使っているお母さんも気軽に使うことができます。

デンマークの多くの施設は多様な特性の方々のためのアクセシビリティを確保するのに加え、同行者と同じ動線になるよう工夫されているように思います。利用者に疎外感を与えない好事例です。またデンマークの建築は、天窗を持つ大きな吹き抜けにエレベーター、エスカレーター、階段などの上下移動を設けている設計が多いように思いました。施設全体に光を取り組む効果的な方法だと思いますが、日向が好きなデンマーク人の気質が影響しているのかもしれませんが。

4. 点字ブロックにみる統一性と柔軟性



コペン中央駅構内に設置されている点字ブロックを見ながら「これは飾りだね（使いものにならない）」と結論づけるメンバーたち。それにしてもデンマークの点字ブロックは多種多様です。誘導ブロックの突起の本数は一本から四本まで、ごつごつしたブロック石で点字ブロックに見立てているもの、点状の突起で誘導しているもの、金属板で代用しているもの等々。敷設が不十分で、誘導された先に何も無いという事例も数多く見受けられました。揺るやかなカーブを描く点字ブロックは、見た目こそ美しいですが、視覚障がい者にとって曲線移動は方向感覚を失いかねません。誘導ブロックの形状が途中で変わるのも戸惑うでしょう。現地で見かけた数人の視覚障がい者は、確かにほとんど”アテ”にしていまませんでした。これでは敷設する側の自己満足といわれても仕方ありません。



何人かのデンマーク人に聞いてみると「自分たちの地域だから、自分たちの思うようにしたい。だから、それぞれの地域で（点字ブロックが）異なるのは、その結果だよ」といいます。大胆な政策転換も厭わない国民性で、標準化よりむしろ柔軟性に重きをおきます。それ故にこうした割り切りの良さも出てくるのかもしれませんが。また潤沢な福祉財源を背景にアシスタントヘルパー制度による介助サービスを受けられるということも背景の一つかもしれません。

このようにあまりに不揃いなものどうかとは思いますが、ただ一方で、あまり盲目的に統一化をはかるのも考えものだと思います。日本ではガイドラインに沿ってはいるものの、利用されているの？と感じる事例が多くあります。点字ブロックを敷設することが目的化しているのです。少しでも利用者の使用シーンをイメージすれば、おのずと対応も変わってくると思います。その結果、地域によって仕様が変わってもいいのではないのでしょうか。

デンマークでみた多種多様な点字ブロックの多くは、利用者との対話を通じて仕様を決定しているといえます。どのような合意形成であったかは伺い知れませんが、あくまで作り手と使い手の対話を起点に、ガイドラインに対して盲目的にならないように開発を進めたいものです。

5. 交通機関における多様性



歩道に関しては及第点といったところでしょうか。アスファルトの代わりに石のボードを敷き詰めて車椅子、乳母車のために平滑面を用意しています。ただ所々にある小さな凹には要注意です。車椅子の前輪が簡単にスタックしてしまい、上肢に力が入らない車椅子ユーザーは簡単に車椅子から飛び出してしまう。因にデンマーク人が使っている乳母車はどれもタイヤが分厚くサスペンションが効くなど大きな段差でも簡単に乗り越えられるようになっています。環境によって使うものにも影響がでているのかもしれませんが。



対象的に自転車は非常に恵まれています。コペンハーゲン市内の幹線道路には必ずといっていいほど自転車用道路が整備されています。バイク、電動車椅子など動力をもつモビリティも自転車用道路の使用を認められているようですが、車道と歩道から分離されていることで安心して走ることができるといいます。また自転車は電車にもそのまま乗り込むことができます。跳ね上げ式の椅子が取り付けられた車両には自転車の他にも乳母車、車椅子、電動三輪・四輪車、大きなスーツケースを持った乗客など多様な方々が利用しています。

日本で自転車を電車に持ち込むには、輪行袋に入れることが求められています。都心の混雑した電車内では他の乗客に迷惑がかかるからというのが理由のようですが、デンマークのようにモビリティ専用の車両を用意すれば、輪行袋に入れることなく気軽に自転車を持ち込め、かつ車椅子、乳母車など多様な利用方法が広がるように思います。公共交通にどうやって多様な利用者を包括していくか、安全性など様々な課題がありますが、同時に大きな可能性を秘めているように思います。

6. バリアフリーツアーの限界

今回、私はガイド役を務めたのですが、石畳の舗装状態が悪く、車椅子ユーザーには絶えられないということで途中で引き返した訪問先がありました。私の事前のリサーチ不足につきるのですが、なんともやりきれない気持ちになります。

ある旅行代理店によれば、“バリアフリーツアー”（障害をお持ちの方を対象としたツアー）は通常のツアーに比べ高めの価格設定だといいます。事前のアクセシビリティ調査に加え、そのほとんどの行程に専用車をチャーターして移動するためです。車椅子ユーザーにとって公共交通機

関の利用はどうしても時間がかかります。また車椅子で使えるトイレを探すもの一苦労です。その点、専用車であれば行程管理がしやすくなります。

ただ旅の楽しみというのは、友人と一緒にいてこそということもあるでしょう。バリアフリーツアーという特定の方向けのサービスでは、それが適わないばかりかコストダウン効果も得られません。例えば、同行者と一緒に作り上げていくことを前提としたツアーであれば、共に旅を楽しめるものになるかもしれません。現地の調査なども分担し、互いに助け合いながら観光をすれば、仮になんらかの障害で行けなかったとしても楽しい思い出になるでしょう。ニーズが異なるから、それぞれのサービスを用意するのではなく、互いに助け合いながら作り上げるカタチもあっていいのではと思います。

7. 利用者の選ぶ権利

今回宿泊した部屋はバリアフリールームでした。しかし同室だった車椅子ユーザーの知人は、通常の部屋でもなんとかしてしまうようで、特にバリアフリールームに拘らないといいます。ただ予約する際に車椅子ユーザーであることを伝えると「車椅子対応のものが無い」というように自分の意志とは反し、カテゴリズされてしまうといいます。そもそも車椅子ユーザーが使えるかどうかは、サービス提供者が決めるのではなく、その利用者本人が決めるものです。サービス提供者は十分な情報提供を行い、判断を利用者に委ねる姿勢が必要ではないでしょうか。よってホテルの予約も、バリアフリールームがあるかどうかではなく、全室の設備、概略図を判断材料にしながら予約するというのが自然な姿のように思います。知人は写真があれば大方、想像がつくともいいますが、例えばホテル全室の360°パノラマ写真が公開されていれば、部屋の設備チェックも一目瞭然かもしれません。

8. 文脈の中で情報提供

耳の不自由なメンバーには要約筆記、そしてつたない手話を駆使しながらコミュニケーションを図っていました。ただつつい必要事項だけを伝えてしまって、戸惑わせてしまうケースがありました。例えば、集合時間の変更、待ち時間の延長などは、なぜそういう事態になったかの文脈も一緒に伝えないと、なかなか理解するに至りません。コミュニケーションとはある文脈の中に成立していることを思い知らされます。

9. まずは一言聞いてのサポート



成田空港での介助の様子（左上写真）です。大勢で寄ってたかつてのサポートは見ていて、少々いたたまれなくなります。サポートされる側も思わず悶絶です。おそらく基本的な研修さえ受けていないのではないのでしょうか。もしくはマニュアルだけ読みあさって現場に駆り出されたのかもしれません。

障害をお持ちの方に対する配慮というのは、“障がい者”という通念で理解し、その人自身を見ようとしない傾向があるように思います。車椅子を使っていたとしても、その身体特性は多種多様です。固定観念を捨て、まずは「どのようにサポートしましょうか？」と尋ねて柔軟にサービスする必要があります。

一方、デンマークは非常にカジュアルです。「今日は沢山いるわね。ハイ、次、車椅子乗る人は？」と半ば冗談まじりに声をかけるコペンハーゲン空港のスタッフ（中右上写真）は、日本人のそれとは対照的です。個人的には、こちらの方が自然に会話が生まれ、気軽に介助をお願いできる関係のように思います。

我々日本人が彼らと同じようにカジュアルにする必要はありませんが、まずはマニュアルだけで理解したつもりにならないこと。前述の点字ブロックの事例のように建築設計においても同じで建築基準法、バリアフリー新法に準拠しているからといって満足してはいけません。環境は多様であり、ガイドラインは決して万能ではないということを肝に銘じておく必要があります。“障がい者”という“くくり”ではなく、あくまで多様な利用者の一つの属性と捉えることができれば、その当事者の気持ちになった配慮と設計に繋がると思います。

10. まとめ

昨年のデンマーク留学中もコペンハーゲンには何度も訪れましたが、やはり当事者との同行は、より多くの気づきが得られるものだと再認識しました。ユーザーインクルージョンの理念は観光においても同様に展開されるべきものですね。そして日本の公共交通のアクセシビリティの高さも感じました。日本全体におけるユニヴァーサルデザインの取り組みが着実に成果を挙げているからのように思います。

一方で、国ごとに力点が異なることも興味を惹かれました。柔軟で整合性はとられていないが大胆な施策と設計が施されたデンマーク。標準化は進んでいるが、もうひとつ気持ちよさに欠ける日本。もう私たちは水平展開でボトムアップを図る段階から、個々のユーザー像を捉えた大胆な開発をすべき時期にきているのかもしれない。

以上

IAUD Newsletter vol.3 (2010 年度) バックナンバー



【4月号】

1. 特集：**towards2010** IAUD 2010 年度活動方針
～国際会議を契機にUDのさらなる普及発展と国際化を～
2. 株式会社 ユーディット 第25回「障害者とテクノロジー会議」参加報告
～情報のユニバーサルデザインを体験する5日間～
3. Case Study：標準化研究ワーキンググループ
「IAUD UD マトリックス ユーザー情報集・事例集」出版の取り組み連携
4. 世界のUD動向：Design for All 財団 2010年アワード授賞式
【UD2010ウォッチング】ほか



【5月号】

1. 特集：**towards2010** 会議の成功を祈念して
～「浜松まつり」で国際UD会議開催記念凧が大空に～
2. “色覚の多様性”に配慮する社会づくりを目指して
～リコーグループのカラーユニバーサルデザイン活動への取り組み～
3. CaseStudy：移動空間プロジェクト
「JR 静岡駅～新静岡駅周辺移動情報シームレス化研究」について
4. 世界のUD動向：【UD2010ウォッチング】ほか



【6月号】

1. 特集：**towards2010** 「世界を変えるデザイン展」会場から
～今までのやり方では何も解決しない、新しいアプローチが必要～
2. NEC グループのUDへの取り組み
～「人と地球にやさしい情報社会」の実現を目指して～
3. CaseStudy：メディアのUDプロジェクト
「カラーユニバーサルデザイン配色セット」開発への取り組み
4. 世界のUD動向：ノルウェー「INNOVATION FOR ALL 2010」参加報告
【UD2010ウォッチング】ほか



【7月号】

1. 特集：**towards2010** デザインフォーオール/UDを本流に
デザインフォーオール財団代表フランチェスク・アラガイ氏からの寄稿
2. 株式会社リムコーポレーション ユニバーサルデザインフォントの取り組み
～ディスプレイ書体 Uni-Type™ が提唱したUDコンセプトの検証～
3. Case study：余暇のUDプロジェクト～動きが出てきたCM字幕～
4. 世界のUD動向：「IAUDアワード2010」実施のご案内、
「ユニバーサルキャンプ in 八丈島」参加者募集、【UD2010ウォッチング】他



【8月号】

1. 特集：**towards2010** 参加者のコミュニケーションを支援
～国際UD会議での情報保障について～
2. 東京電力のユニバーサルデザインへの取り組み
～電気を大切におつかいいただくために～
3. CaseStudy：住空間プロジェクト
「夢のみずうみ村山口デイサービスセンター視察レポート」
4. 世界のUD動向：「かわさき産業デザインコンペ2010」作品公募のお知らせ
【UD2010ウォッチング】「国際UD会議2010への期待」ほか



【9月号】

1. 特集：**towards2010** 国際UD会議地元委員会河原林会長に聞く
～会議を契機に人の絆と意識のさらなる深まりを期待～
2. バンダイのユニバーサルデザイン～世界中のお客様に「夢」と「感動」を～
3. CaseStudy：食のUDプロジェクト 「やけど注意」を伝えるピクトグラム
4. 世界のUD動向：パーソナルモビリティの可能性
～「HEALTH & REHUB」と「The Mobility Roadshow」の視察を通じて～
【UD2010ウォッチング】



【10月号】

1. 特集：**towards2010** いよいよ開幕、国際UD 会議記者説明会開催
～充実した会議プログラムの概要ご紹介
2. モリサワUD 書体への取組み～書体創りのノウハウを活かして～
3. CaseStudy：衣のUD プロジェクトその機能は美しいか
～おしゃれで機能性の高いUD ジャケットの実現を目指して～
4. 世界のUD 動向：アジア最大級のパッケージ総合展
「2010 東京国際包装展」で IAUD の活動を紹介！



【11月号】

1. 特集：「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 in はままつ」速報
～人と地球のために一持続可能な共生社会の実現へ向けて～
2. 世界のUD 動向：スティグマデザインからの解放
～「REHACARE International 2010」の視察を通じて～
「第5回ユニバーサルデザイン全国大会」、「include2011」開催ほか



【12月号】

1. 特集：「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 in はままつ」速報（その2）
～併設展示会、IAUD 研究部会発表など～
2. 特別寄稿：リアルタイム速記システム「はやとくん」での字幕付け報告
3. CaseStudy：労働環境プロジェクト
～オフィスセキュリティのユニヴァーサルデザイン～
4. 世界のUD動向：「バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰」、
「サステナブルデザイン国際会議 — Small Conference」ほか



【1月号】

1. 新春特集：山本会長・岡本議長に聞く～国際UD 会議を終えて、IAUD の今後～
2. 「第5回ユニバーサルデザイン全国大会」参加レポート
～「配慮」から「前提」の社会へ
3. 世界のUD 動向：「第5回サステナブルデザイン国際会議 Destination 2010-2022」本会議開催！
新刊紹介「誰でも手話リングル」 ほか



【2月号】

1. 特集：国際UD 会議の講演者にお聞きしました。
2. 国際UD 会議 2011 「48時間デザインマラソン」
～当事者参加によるデザインワークショップの意義～
3. 世界のUD動向：「第5回サステナブルデザイン国際会議」本会議開催



【3月号】

1. 特集：研究部会 PJ/WG 主査対談 ～国際会議を終えて～2010 年度振り返り～1
2. 世界のUD 動向：デンマークにおける観光のユニヴァーサルデザイン体験記
巻末：IAUD Newsletter vol.3(2010 年度)バックナンバー

■「UD先進事例 多様性への挑戦、IAUD会員の取り組み」電子書籍で発刊！

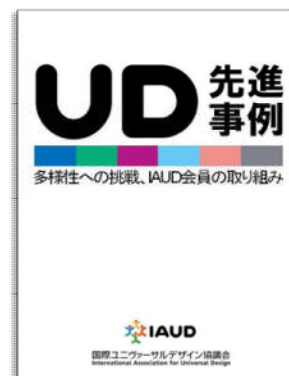
幅広い領域にまたがるIAUD会員の先進的な取り組みが一冊の本になりました。

本書は、IAUD会員向け月刊誌「IAUD Newsletter」で約2年半の間に掲載された32社・団体の取り組み記事をもとに一冊にまとめたものです。

また、本書オリジナルコンテンツとして静岡文化芸術大学の河原林桂一郎副学長に『企業や社会におけるUDの動向と今後の方向性』と題して書き下ろしていただきました。

UDの原点は多様なユーザーを理解することであり、対象が多様であることは同時にアプローチも多様になりますが、本書は、さまざまなデザイン領域の基本事例として、また企業経営や商品企画にUDやダイヴァーシティの考え方を取り入れるための参考事例としてなど、幅広くご利用いただけます。

なお、発刊当初は、インターネット常時接続の環境でしか閲覧できませんでしたが、iPad版/iPhone版は5回までダウンロードして閲覧することが可能になりました。オンライン書店上では最初の数ページを立ち読みすることもでき、閲覧できる新機種の新機種の発売も相次いでいますので、ますます手軽にお読みいただける状況となってきましたので、ぜひ、一度サイトをご覧ください。



<主な内容>

推薦の言葉：「人にやさしい」からはじまるイノベーション

経済産業省製造産業局デザイン・人間生活システム政策室長 廣瀬 毅

第1章 企業や社会におけるUDの動向と今後の方向性

静岡文化芸術大学副学長 河原林 桂一郎

第2章 UD先進事例（32社・団体）

掲載企業・団体（本書掲載順）：東京電力、パナソニック、富士通、日立、トヨタ自動車、TOTO、リコー、岡村製作所、日産自動車、大日本印刷、東芝、三菱電機、イトーキ、積水ハウス、コクヨファニチャー、INAX、丹青社、博報堂ユニバーサルデザイン、静岡県、リムコーポレーション、東洋インキ、セイコーエプソン、東急車輛製造、ダイワハウス、アップアローズ、浜松市、静岡文化芸術大学、ユニバーサルイベント協会、ヤマハ、ユーディット、NEC、バンダイ

※本書をご購入いただいた方で、視覚障がいやディスレクシアなどの特性により、読み上げ可能なテキストの電子データ（.txtで作成）を必要とされる方にテキストデータをご提供させていただきます。詳しくは本書巻末の【テキストデータのご案内】をご覧ください。



●本書はオンライン書店 shinanobook.comにてお求めください。

価格：1,890円（定価1,800円＋税）

A5判 256ページ

出版社：株式会社UDジャパン

●問い合わせは 国際ユニヴァーサルデザイン協議会 事務局まで

【編集後記】 ○2010 年度活動の締めくくりとして「2010 年度成果報告会」が3月3日、NEC 本社において開催され、盛況のうちに終了しました。(詳しくは IAUD のサイトをご覧ください。)しかし、その翌週末には世界でも未曾有の大災害に見舞われました。被害の規模が明らかになるにつれ、また原発の津波被害による第二次災害発生ということもあり、その影響の広がりには日に日に増すばかりで、約 20 日が経過した今もまだ、その全貌は見えてきませんが、惨状とともに国民の気持ちが一変してしまいました。

本誌でもまずは、亡くなられた方々のご冥福を謹んでお祈りするとともに、罹災された皆さまとそのご家族の方々に心よりお見舞いを申しあげます。

これから復旧・復興に向けた動きも活発になってくるものと思います。こういう状況において、国や自治体をはじめ、所属する組織や団体、そして国民一人ひとりがこれからどのように行動するか、経験のない規模の災害だけに、それぞれの真価が問われてくるでしょう。どうすればそれぞれの専門領域を活かし、その力をうまく結集させ、より大きな力にしていけるのか。そのための工夫やしくみが必要とされています。

また、一方で一人の生活者としてどうすべきか。例えば、ものが不足しそうだからあわてて買いだめする、逆に放射能が心配だから訳もなく買い控える、という行動が見られます。人は頭で理解していても、何となく不安な感情が勝ってしまって、良くないと分かりつつ行動してしまいます。これは心理学者によると不安解消のための代償行為ということのようですが、具体的な問題解決には何の効果もなく、かえって物不足を拡大したり風評被害を広げたりする結果となってしまいます。不安を感じるといふ時点ではまだ被害者ですが、それを解消しようとして闇雲に行動を起こした時、本人が意識せずともどこかにシワ寄せがいき、その時点から加害者に転じるということです。多くの国民は何か役に立ちたいという気持ちを持っていて、世界にも同じ気持ちの仲間が大勢いることが、ニュースなどでも伝わってきます。一日でも早い復旧・復興のために、自分自身が何ができるかとともに、世界のこういう人達の力を信じ、節度ある中にも勇気ある行動をしていきたいものです。

ところで、本誌も来月から4年目に入ります。多くの皆さまに支えられて、ここまですべて続けてこられたことを大変喜ばしく思います。改めまして執筆や情報提供でご協力いただいた皆さまに深く感謝いたします。IAUD もいろいろと難題をかかえています。会員の皆さまのご協力のもと、UD 社会の実現に向けて新たな気持ちで活動に取り組んでいきたいと思っておりますので、なお一層のご支援をお願いいたします。(薦)

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。

ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せください。

また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。

ご連絡は、news@iaud.net へ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.3 No.12

2011 年 3 月 31 日発行

国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110

電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417

e-mail: info@iaud.net

情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9

(IAUD サロン)

トヨタ八丁堀ビル 4 階

電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847

e-mail: salon@iaud.net